

オセアニア船旅 2018①

【東南アジア編】



2018年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

オセアニアへの船旅を2018年1月8日～3月4日の56日間で行ってきた。この様子は洋上特設ブログで公開していたが、このほどブログ（日記）ではなく旅行記として書き改めた。今回は東南アジア編として日本出発から台湾、フィリピン、インドネシアをまとめた。

第一章 出航

■2年前に予約

2016年春～夏に106日間の地球一周の船旅をした。主に北半球の地球を一周するコースだったが、それでもアフリカ大陸、南米大陸も端だが一応入っていた。

そして残りはオーストラリア大陸だ。今回のオセアニアクルーズは地球一周クルーズの出航前に予約したもので、およそ2年前になる。地球一周とオセアニアで5大陸制覇になる。

今回、真冬の日本を脱出して真夏の南半球オセアニアを旅する。この脱出という言葉には何だか優越感を感じる。自分たちは違う世界に行くのだということからだろう。

そしてその違う世界とは一体何だろうか。



■ オーシャンドリーム号

今回乗船した船も地球一周と同じオーシャンドリーム号（35200トン）だ。1981年にデンマークで造船され、船齢37才。ヨーロッパ仕様でパナマ船籍なのでいわゆる日本船ではない。

クルーズの企画はNGO（非政府組織）のピースボートで、主に船内イベントを担当して対外的には船の顔になっている。

実際に旅行を催行としているのが旅行会社のジャパングレイスでオプションツアーの手配や旅行代金の回収などの船旅の主業務をこの会社が担当している。

そして船の運航を担当しているのが船会社のシーホークコーポレーションで、船長や機関長はこの会社の所属になるが、この船会社はあまり表に出てこない。旅行会社が観光バスをチャーターした際の下請けのバス会社のようなものだ。



■ 横浜出航からハプニング続出

1月8日、出航予定は13時だが、既に私たち夫婦は10時30分にはオーシャンドリーム号の自室キャビンでスーツケースから荷物を出してロッカーに収納する作業に奮闘している。

12時30分、携帯電話が鳴る。かつて私が勤めていた会社の後輩Tくんからの電話だ。彼だけが地球一周の時にも見送りに来てくれて、今回も彼だけが見送ってくれる。なんて熱い男だ。

ところが出航時間の13時に、出航式を行うもののなかなか離岸しない。おかしいとは思っていたがなんと13時20分にサイレンとともに消防車と救急車がやって来て船に横付けされる。担架が運ばれ乗客が搬送されるというハプニング発生だ。前回の地球一周クルーズでもこんなことは日常茶飯事だ。またしても始まったかという実感がわいてくるから面白い。

そして14時になってようやく離岸する。雨も降ってきたので見送り客もまばらになり、なんとも寂しい出航風景だ。あとで聞いた話ではケガ人が出て搬送されたそうだ。



その人の今後のクルーズはどうなるなかと、費用は戻らないのかなどと近くにいた人と話題になる。多分、ケガが治ればどこかの寄港地で合流できるので、その寄港地まで行けばよい。

ケガの治療費は海外旅行保険で支払われる。ただ旅行が再開できるかが問題で、横浜港で乗船したので旅行は始まった。そして下船が一時離脱ならば再乗船が認められるが、旅行放棄ならば再乗船はできない。本人は分からないだろうがどういう手続きをしたかが問題だ。

そしてそこまで行く交通費は海外旅行保険から費用が支払われるか等々、話題に事欠かない。

■乗客

本日のオリエンテーションで今回のクルーズ乗客の概要が知らされた。延べ人数約 1000 人、男女比は約 50%、リピーター比率は 80%、年齢構成として高齢者の割合は 80%~90%、最年少は 2 才 (2 名)、最高齢は 94 才とのこと。

そういえば避難訓練の際に小さい子供がいて、年齢を聞いたところ 3 才と言っていたことからすると 2 才が 2 名の他に 3 才も乗っていることになる。

これは面白い、56 日間くらいのクルーズでもそんな子供も連れてくるのか。地球一周クルーズでは最年少は 19 才だったのに比べると何だか嬉しくなる。

私は双子の孫たちの顔が浮かんできた。連れて来れば最年少の 1 才だ。

国籍はもちろん日本人が多いが、それなりに多国籍で欧米人や中国人も見かける。

■船揺れ

夕方から船の揺れが激しくなる。夕食のテーブルでは「今まで乗ったクルーズで一番揺れますね」という声も聞こえる。何人かは気分がすぐれないのか途中退席する始末だ。

私も船酔いしそうなので食後に 9 階の居酒屋行くのもやめてキャビンに戻る。もはや真っ直ぐ

歩けない、廊下の壁に当たりながらたどり着く。ベッドに入りしばし休憩していると船内放送で船揺れが激しいのでオープンデッキに出るときは注意してくれと言っている。

確かにかなり揺れている。私の船旅経験の中でも1、2を争う程に揺れている。波が船底にぶつかるドスンという大きな音、その衝撃と揺れでギシギシときしむような音はまるで船の悲鳴のようだ。

2時間もすると再度船内放送がある。船揺れが更に激しくなってきたのでオープンデッキへの出入りは禁止、倒れやすいものは寝かせておくなど対策をとってくれという。

クルーズ初日にして大変な事態だ。クルーズ初体験の人もいるだろうが船旅を嫌いにならないかなど余計な心配もしてしまう。

■大浴場は工事中

ヨーロッパ仕様の船なのでこの船には大浴場がない。日本近海のフェリーでも大浴場があるのに、ということで大浴場を現在作っている。

乗船して間もなく、この大浴場を見てきた。船の最後尾の7階のデッキ部分に男女別の露天風呂を増設中で、船尾なので航跡を見ながら入浴できる。天井は外からの目隠しのために薄い斜めの板が張られているが、風呂の中からは空が見える。

56日間の航海中は毎日工事をしてきた。航海しながら作るというのがこの船らしい。



■神戸寄港

横浜出航後、相変わらず船揺れが激しい。それでも元気な乗客は元気だ。それも若者たちよりも中高年が特に元気だから驚く。

確かに子供や若者の方が車や船に酔いやすい。年を取ると三半規管も老化するのか、酔うことにも鈍くなるのだろう。それは人生に酔うことも同じなのかと思わずハットしてしまう。

地球一周クルーズで一緒だった関西在住のG姉さんが神戸港に見送りに来てくれた。そして乾きモノのつまみを頂く、酒飲みの心がわかる差し入れだ。心遣いが本当にありがたい。

神戸でまた多くの乗客が乗り込み、あちらこちらで再会の挨拶が聞こえてくる。

私も見慣れた前回の地球一周のクルーズで知った人達と再会する。福岡のおばさんは船内の居酒屋の常連でとにかく酒が強い。名刺の裏にはたくさんの肩書や趣味が書かれている 83 才のNさん。1年の半分は海外旅行しているZさん、彼ももう 80 才を超えている。

とにかく旅で会う人は元気だ。だから旅ができるのか、旅があるから元気なのか。そして共通して言えることは、顔は覚えているが名前が出てこない。

■船上生活始まる

上げ膳据え膳の食事に始まり、自分の都合だけで生活する、飲みに行っても終電も心配しない。地上の生活とは一変した全てが自由な毎日がこれから始まろうとしている。



朝起きてレストランに食事に行き、好きなものを皿に取って食べる。食べ終わるとウェイターが片づけてくれる。そしてコーヒーを飲みながら今日一日何をしようかと船内新聞に目をおしチェックを入れる。

部屋に戻るとハウスキーパーが部屋の掃除とベッドメイキングをしてくれる。そしてまた部屋を出て私は喫茶コーナーでこの記事を書いている。

再びこの至れり尽くせりの生活が始まるのだと実感する。生活のための支度も片付けも全てクルーがやってくれる。リゾートとは優越感だともいわれ、船旅の原点かもしれない。

妻も何だかウキウキしている。

何か同好会にでも入ろうと思い、将棋同好会に顔を出す。小中学生の頃は仲間と将棋大会を定期的で開催しておりそれなりの腕前になっていたが、何しろおよそ 50 年ぶりの挑戦になる。

将棋同好会には 15 名くらい集まり、ほとんど全員が年配者でおばさんたちも 5 名参加している。そのおばさんたち全員が初心者で駒の動かし方から学びたいとのことで、そのチャレンジ精神には恐れ入ってしまう。やはり男より女の方が元気で、向上心がある。

本日は 5 局やって 3 勝 2 敗という結果だった。50 年ぶりとしてはまずまずかもしれない。

■ウェルカムディナー

この船にはドレスコードがないというふれこみだが、それでも 4 階のレストランで開催される船長主催のウェルカムディナーにはおしゃれをしてきて下さいと案内されている。堅苦しいのが苦手な人は 9 階にあるカジュアルなレストランで食事をすればよいことになっている。

前回の地球一周の時にも、公式ディナーで T シャツに半ズボン、あるいは帽子をかぶったままの人などが散見されていて、何と常識知らずと感ずることが多々あった。今回は船側も考えたのか、4 階レストランの入口には帽子や半ズボンが NG ですという絵文字の標識が置かれていた。

そして今、私のすぐ前を半ズボンの人間が入場しようとしている。同行している友人が標識を見つけて指摘したが、何と本人は「無視！」と言いながら入場していく。

いい年をした人間がどうしようもない。私は腹が立ち、そしてあきれ果ててしまう。しかし相変わらずモラルの低さには何故か 2 年ぶりの懐かしさも感じる。

ウェルカムディナーで同じテーブルになった若者と話す機会が持てた。彼は大学生で、現在休学中だが、4 月から復学をするので 3 月 4 日に帰国するこのクルーズに乗ってきたという。資金はアルバイトで稼ぎ、視野を広げるために初めての海外旅行としてこのクルーズ選んだという。ハキハキと自分のことを話す好青年に同じテーブルに座ったおばさんたちは少女のようにはしゃぎまくっている。妻もその一人だ。

そして本日が彼の 21 才の誕生日という事で、レストランのクルーたちがハッピーバースデーを歌いながらマラカスやタンバリンを持って現れ、ケーキのプレゼントとともに誕生日を祝福してくれる。まわりからは「21 才、若くてうらやましい」の声が聞こえる。

同じテーブルの私たちまで誕生ケーキのお裾分けにありつけた。

■なんてすごい 83 才

夜、9 階にある居酒屋に飲みに行く。今回のクルーズでは初めての居酒屋だ。そして昨日挨拶を交わした 83 才の N さんが居たので早速 2 人で飲み始める。

話していくとこの人の凄さが驚きとともに分かってくる。旅行をはじめテニス、俳句、郷土史

研究、スイミング、英会話いろいろなことをやっている人だが、その基軸にあるのが NPO 日本スコットランド協会という。

スコットランドが好きになり、結果スコッチウイスキーが好きになりミニチュアボトルの収集にも力を入れ、その数は 3000 本という。

スコットランド人と話すために英会話を今でも習っているという。そして驚くのは 70 才を過ぎてからも年に一カ月間くらいの語学留学をしているという。そのために世界各国に友人ができて、今回のクルーズの寄港先でもその友人たちと会うという。

寄港予定のニュージーランドのクライストチャーチには 1 カ月半の留学をしていたというので、土地勘があるのでレンタカーを借りて回るといふ。私から厚かましくもジョインさせて欲しいとお願いする。

83 才の人に案内と車の運転をお願いするとは何ということだ。

それにしても高齢になっても語学留学とは恐れ入ってしまう。若者から元気をもらうのではなく、83 才から元気をもらうとは思わなかった。

色々なことをやっているから、講演の依頼もあるという。講演をするためには自分の経験や考え方を整理し勉強しなくてはならず、それが自分のためになるという。

そして私は、このクルーズの間に旅のチカラ研究所として初講演を行う決心がついた。

■時間というステージ

東シナ海に入ったが、海は荒れている。外は風が強くそして寒い。

朝食で今回歌手として乗船してきた「早苗ネネ」とたまたま同じテーブルになった。彼女はあの昔「じゅん&ネネ」という女性二人のアイドルユニットのネネの方だ。早苗というのが本名で、昔の芸名と合わせて今の芸名になっているという。

どう見ても 67 才の普通のおばさんで、とても芸能人には見えない。ノーメイクなので写真を撮らせてくれというのもしづらく、世間話を交わしたのちテーブルを後にした。

彼女の一回目のステージが始まる。

「和歌うた」というステージタイトルがついている。百人一首に音楽を付けて歌うというもので、映像に音楽が流れ、百人一首の文字がカラオケ画面の歌詞のように映し出される。音楽は邦楽調もあれば、現代調、ラテン風、ボサノバ風と幅広い。

目の着けどころが面白い、そして構成や曲のアレンジもなかなか良い。歌も上手く声量もある。何よりも今朝ほどのノーメイクのおばさんとは全く異なる歌手の風貌になっているからすごい。

100 首の短歌に全て曲をつけて 1 枚のアルバムにしており、今日のステージでは 45 首を披露してくれた。

彼女と百人一首との出会いは 20 年前で、46 才の高校 2 年生の時だったという。ん、なんだか変だ。



実はアイドルデビューのため高校2年生から学校に行っておらず、人生が一段落した46才になって高校生をやり直すために定時制高校に通い始めたという。その時に古文の授業で百人一首と出会って感じるものがあったという。それあと十数年かけてメロディを付けたという。

彼女は「年齢を重ねないと分からないものもある」と言う。これはある意味真理かもしれない。

46才で定時制高校に通わなければ、今の彼女はなかつただろう。いくつになっても挑戦することは大事だ。何才になろうとも勉強、体験、出会いが必要なのだろう。

時間というもう一つの主役がこのステージには存在する。

彼女のデビューから50年、その彼女は30年経ってから2度目の女子高生を経験して1000年前の人々が作った百人一首と出会った。30年という時間が彼女にその価値を理解させて、そして現在このステージで多くの乗客に1000年前の人々の思いを伝えている。

最後のアンコール曲は、昔のデビュー曲「愛するってこわい」を歌ってくれた。私の隣に座っていたおじいさんは、まさか生でこの歌が聞けるとはと半分泣いていた。



第二章 台湾

■台湾の基隆（キールン）上陸

1月12日、台湾の北の端にある台北からほど近い基隆という港に寄港する。曇り空だが、かなり寒い。それもそのはずで気温は12℃しかない。ダウンジャケットを着こんでいる人も多い。

台湾は私たち夫婦にとっては2度目の訪問だが、その時は台北で過ごしたため基隆は初めての訪問になる。今回のクルーズで7カ国を回るが、過去に訪問したという国はここ台湾だけだ。その意味では心のどこかに少し余裕がある気がする。

今日は基隆の街を散策することにする。地図を広げると小さな街で乗り物を使わなくても歩きだけで容易に回れる気がする。

そして今日一緒に行動することになったのはEさん。彼とは昨夜の居酒屋で意気投合した間柄で、37才というから中高年が圧倒的に多いこの船では極めて少ない世代だ。飲んでいるうちに世代を超えてお互いの考え方や生き方に引かれるものがあつたのか、今日一緒に散策することになった。

彼はシンガポールで2年間仕事をしていたという経験から言葉もそうだが東南アジアの生活に慣れている。ただし台湾は初めてという事でワクワクしているようだ。

台湾は日清戦争の結果1895年から日本統治が始まり太平洋戦争の終結まで50年間は日本が統治していた。その間に日本流のインフラはじめ文化も浸透して、後の台湾政府の政治よりも日本統治の方が良かったという国民意識があるという。

だから親日派が台湾には多い。日本のアニメやアイドルが台湾で特別に人気ができるのもそういう背景が大きいと思う。国をあげて反日教育をやっている韓国や中国とは雲泥の差だ。

街は自動車で溢れている。日本車が圧倒的に多く、それもトヨタ車が多い。さらに自動車と歩行者の間は自転車ではなく、多くのバイクが走っている。バイクは狭い街中をすいすいと抜けていくには持ってこいで、街に氾濫している。そしてこれも日本製が多い。

セブンイレブンやファミリーマートも多く見かける。店に入って覗いてみると商品の3割くらいは日本からの輸入品で日本語のパッケージのままになっている。

台湾の文化は日本文化と中国文化が入り交じっているように感じる。決してアメリカ合衆国の匂いはしない。

■基隆を歩く

基隆の街を歩き始める。香港に似ているとEさんが興奮気味に言っている。私もそんな気がする。香港ほど大きな街ではないが、喧噪の中に人々のエネルギーがあふれているという雰囲気似ている。朝から街の至る所で朝食を食べさせてくれる小さな店や屋台から食欲を誘う匂いが漂っている。

自動車やバイクのクラクションが飛び交い、大きな声で話している店の店員、みんな忙しそうだが、笑顔が絶えない。基隆の街には活気がある。そして人々は親切だ。

私たちがウロウロしていると見知らぬ現地人が話しかけてくる。若いおじさんでアラフォーというところか、それなりの身だしなみをしているので金目当ての輩ではなさそうだ。

どこに行きたいですか？と台湾語で聞いてくるのでEさんは英語で散策を楽しんでいると伝える。あまり通じていないようなので今度は私が日本語で身振りを入れて答える。何となく伝わったようで、良い旅をということで別れる。

改めて、ここは日本の影響力が最も強い友好国だと感じる。



街の中心からほど近い中正公園へ行く。行くというよりは登るという感じで、小さな山の上にある公園でお寺のような大きな建物が頂上に立っている。街を一望できるので観光客も多い。

街はずれにある海門天険という場所に行く。もちろん歩いていくが、なかなかたどり着かない。道を間違えたらしい。現地の人に聞いてみるが、英語は通じない。ガイドブックの写真を見せるとみんな親切に教えてくれる。ただし、3つ目の信号を右とか、あと 200m くらい行ったら左に曲るとかという具体的な単語が分からないので、あちらとか向こうとか方角を聞くだけだ。そのためたどり着くのに数人に聞くことになった。

登り口に着き、ここも山の上なので階段や坂道を登ることになる。先ほどの中正公園の2倍くらいの高さがあり、頂上に着いたときには結構な汗をかいている。

ここは 1840 年アヘン戦争の時に港に入って来る敵の船を砲撃する要塞だったところで、その意味では見晴らしは抜群に良い。大砲のレプリカがいくつか置かれて要塞の跡も残っている。要

塞といっても朽ち果てたレンガ作りの塀やアーチが残っている程度で、もはや遺跡という感じがする。保存状態は良くない。江戸時代末期のことだからしょうがないが、レプリカの大砲が新しいのでその対比が際立って不思議な感覚を覚える。



この遺跡はかなり広く、山の中でひっそりと緑に覆われている。昔のアヘン戦争を想像しながら静寂の中を歩くのも面白い。「遺跡は当時を想像して観る」と昔イタリアに行った時のガイドが言っていたのを思い出す。

ここに1時間程滞在したが私たち3人以外は誰とも会わなかった。

■中華麵の食事

歩き疲れて、街に戻るとちょうど昼飯時だ。朝よりも格段に屋台や店の数が増えており、中華料理特有の匂いも美味そうに私たちを誘う。

早速近くの料理店で昼食にする。間口が2mくらいのキヨスクの売店のような店で、対面で接客と料理をするおばさんがひとり構えていて、注文を聞いて麵をゆで始める。そして外の道端には丸い小さなプラスチックのテーブルが2つ程あって、囲むように小さなプラスチックの椅子もいくつか置いてある。

3人は各々別の麵類を頼む。私はワンタン麵、妻はザーサイ麵、Eさんは野菜麵。どれも45元ということで、日本円換算で約170円というところだから安い。

薄味の透明スープで日本のように出汁は効いておらず、あまりこってりしていない。各自好みに応じて色んなトッピングをするようになっているので、辛そうなコチジャンやラー油がテーブルに置いてある。

味は、合格点だ。寒さも手伝って温かい麺ありがたい。



日本のラーメンと比較をするのはかわいそうなのでやめておく。それは、もはや日本のラーメンは国際ブランドになっており、中華料理のラー麺から独自の進化をして世界的な人気になっているからだ。日本にやってくる外国人に食べたいものを聞くと、昔はすき焼き、天ぷら、寿司と相場が決まっていたが、現在はラーメンが必ず上位に入る。

2年前の地球一周でベネズエラの楽団の若者たちが日本まで一緒に乗船していたので、日本で食べたいものを彼らに聞いたところラーメンと言っていたことを思い出した。

■ 35周年リピーターの集い

1月14日には「35周年リピーターの集い」が開催される。この船はNGOピースボートが企画しているが、その発端は若者に世界を体験させるためにということで35年前に学生6人で始めた活動だ。

その35周年を記念してイベントがレストランで開催された。今回のクルーズは80%がリピーターということで、かなりの人数が集まったので立ち席も出るほどの賑わいだ。

挨拶の後に鏡割りがあり、お酒が振る舞われて簡単な料理も用意されてのパーティになる。お酒を飲むために木製の升も記念品として配られるという結構な力の入れようだ。

このイベントでたまたま私たちと同じテーブルについた老夫婦がいるが、旦那さんは今回のクルーズの最年長94才だということで鏡割りのメンバーにも抜擢されてひと仕事をしてきた。

94才には見えない風貌で、そして元気だ。受け答えもしっかりしている。そして奥さんもそれ

なりの年齢、多分 80 代後半なのだろうが、それよりもはるかに若く見える。

この夫婦は地球一周クルーズを 3 回経験し、そして今回のオセアニアクルーズに参加ということでもまだまだアクティブに人生を過ごしている。

旅がこの夫婦の若さの秘訣かも知れない。



第三章 セブ島

■検温

船は台湾海峡を通らずに台湾の東側の太平洋を南下してフィリピンを目指している。フィリピン上陸に当たって全員の検温が本日実施される。検温といってもサーモカメラの前を人間が通過するだけなので行為してはあげさなことはない。しかしこのような処置は珍しい。悪い病気で発熱した人を国内に入れない水際処置だと思うが、初めての体験である。

■セブ島は車が面白い

1月15日フィリピンのセブ島 CIP (Cebu International Port) に接岸した。気温 25℃、寒くもなく暑くもなく過ごし易いが、残念ながら小雨が降っている。

接岸した埠頭は貨物船用のようで歩行者の安全確保のために港内は徒歩禁止になっている。そのため旅行会社が用意したシャトルバスを待っていると「よろしければ一緒に行動しませんか」と声を掛けられる。声を掛けてきたのは 60 才代くらいの男性で、もちろん乗船客だが初対面だ。彼の名は F さん、他にも同行者がいるという。旅は道づれ、二つ返事で OK をした。

Fさんは何度もフィリピンに来ており、現地の事情に詳しくそうだ。

まずは市の中心にあるサンペドロ要塞を目指して歩き始めるが、それなりに距離があるので途中で地元の人が利用している乗り合いバスのようなものに乗ることにした。この乗り物は小型のトラックの荷台に縦長に对面ベンチが設置されていて、後ろから乗り込むもので軍隊の兵士輸送用のトラックを小さくして派手な塗装をしたようなものである。

Fさんに先導され乗り込むが、料金は一人8フィリピン・ペソ（P）という。日本円で20円もしない。



私たちが乗った時は10人くらいだったが、次から次へと乗客が乗り込んでくる。新橋の場末の小さなカウンターだけの飲み屋のようで、お客は自ら気を利かせて席を詰めて座るスペースを空けていく。私の隣にもフィリピン人の若い女の子がちょっとだけ空いたスペースにお尻を入れて入り込んできた。まるでいかかわしいフィリピンパブ状態になる。そしてさらに一人、二人と乗って来る。それでもそろそろ限界になり、結局荷台に16人、前の助手席にも2人という人数になり走り始める。

さらに驚いたのは乗客が運転手に料金を渡すのだが、後ろに座った乗客は前の人に順にお金を送っていく。一番前に座った乗客が運転中の運転手に渡す。釣銭が必要な場合には運転手が釣銭を計算して戻してくれる。その釣銭をまた逆の順番で後ろの座席の支払った人までおつりが戻るという連係プレーを何ごともなくこなしている。

最初の目的地のサンペテロ要塞に到着し見学する。入場料は30P、およそ70円とこれもまた安い。

その後は教会に行くがミサが始まり、たくさんの人々が礼拝している。今日はセブの祭りのようで街にはたくさんの人が出ている。



■大渋滞の中

昼食にFさんのお勧めのマクタン島のレストランに行くことにし、私たち夫婦とFさん、そしてOさんがタクシーに乗り込む。Oさんは今回私が入った将棋同好会のメンバーで、OさんとFさんは同室という4人の珍道中が始まる。

マクタン島への道のりは長かった。セブの祭りもあつてか大渋滞をしている。タクシーの運転手もお手上げの様相だ。

そんな中この国の交通システムに驚く。余程大きな交差点以外には信号がほとんどなく、そのため交差点の入り方がとても難しい。強引な割り込み、いや巧みな割り込みと言った方がいいかもしれないが、見方によれば譲り合いにも見える。突っ込むところと引くべきところを分かっているかのようで、あうんの呼吸という言葉がふさわしい。よく事故が起きないか不思議なくらいだ。

割り込み、急ブレーキ、急発進の繰り返しで、妻が車酔いで気分が悪いと言い始める。そろそろ限界かという頃になって、ようやくレストランに到着する。なんと1時間半の格闘だった。

しかし料金はというと300P、日本円で約700円。日本ならば7000円は取られるだろう。

■地元レストラン

このレストランはFさんの知っている店ではなく、地元料理を食べさせてくれるという事で運転手に連れてこられたが、やや古ぼけた薄暗い感じの店でお客は誰もいない。流行っている店ならばお客で溢れているが、誰もいないというやはり不安になる。変な店に連れてこられたなどというのが率直な感想だ。

それでもFさんが手際よく注文してくれる。まずはビール、そして焼いた地魚、イカの焼き物、野菜炒め、茄子と野菜の煮物のようなものなど。そして見た目は決して美味そうではない。

ところが食べてみるとこれがなかなかいける。いや、なかなかではなく正直に美味い。人は見かけによらないと言うが、店や料理も見かけによらない。嬉しい誤算だ。

勘定は4人合わせて1600P、チップをいれても4000円ほどだ。



■高級リゾートホテル

食後にレストランを出てラブラブ記念碑に立ち寄り写真をとる。そして近くの高級リゾートホテル「シャングリアホテル」に立ち寄る。今まで見てきた庶民の暮らしからかけ離れた存在だ。

私たちが我が物顔で入ろうとすると入口で警備員に呼び止められる。「Stay? (宿泊客ですか)」私はそうとも違うとも言えずに口ごもっていると、Fさんが「Yes, tomorrow (ハイ、明日)」と切り返す。警備員は「Please」と言って笑顔で入れてくれた。なんと素晴らしい。

ロビーを通り抜けると、手入れの行き届いた大きな庭園、緑の芝生がまぶしいくらいきれいに敷かれている。そしてプールがある。



プールサイドには何人かのリゾートを楽しむ宿泊客がいるが、やはり主役はエメラルドグリーン
の海だろう。プールサイドを抜けてプライベートビーチに着く。ゴミ一つ落ちていない真っ白
な砂浜のビーチでは何組かの家族連れが遊んでいる。ビーチベッドにはカップルが寝そべってい
る。外とは全く違う光景が広がっている。

通常この海はエメラルドグリーンになっているのだろうが、あいにくの雨模様の空なので、少
し残念だ。それでも海はきれいだ。

魚がたくさん泳いでいる。子供が魚に餌をあげているので、子供の周りには魚が集まっている
のが、日本ではあまり見かけない光景だ。

まるで別世界、時間が止まっているかのようにゆっくりと時が流れている。



そしてまたタクシーに乗って CIT に戻るのだが、再び渋滞、そしてクラクションやバイクの騒
音がうるさい。信号待ちで止まっていると物売りがやって来る。乞食のような人も多い。

ここは貧困と富裕層との格差が極端なところだという印象を残してセブ島を後にする。

ついでにセブ島での支出を書いておく。トラック 8P、入場料 20P、タクシー片道 600P、片道
300P、昼食 1600P、タクシーと昼食は 4 人で割り勘すると 550P、一人当たり 578P で夫婦二人
分では約 1200P になった。

日本円に換算して夫婦二人で 2800 円は安い。

■ 男の料理研究中

夕食時にたまたま同席したおばさん二人組と、居酒屋に行くことになる。妻は部屋に戻ったが、
3 人で飲んでいると先日知り合いになった K さんがやってきて合流する。年のころなら 70 才くら
いで、このクルーズには結構不満をもっているようで、近々に一杯やりましようとして私が誘っていた
が、偶然一人で現れた。

Kさんからもらった名刺には「男の料理研究中」という肩書が書かれており、差し出がましいが「男の料理研究所 所長」と変えたらどうかと提案する。研究所ですか・・・ちょっと恥ずかしいですねと答えを濁していた。

その「男の料理研究中」という肩書に、前にいるおばさん二人組は興味津々らしく、色んな質問が飛び交う。

何料理をするの？

家では作らないの？

得意な料理は？

買い出しは自分でやるの？

きかけは？

等々尽きないが経緯を簡単にまとめると、男の料理教室のようなカルチャースクールがあつて入会していたが、それが終了したので継続のために自分たちで教室を立ち上げ開催するようになったという。

当初は講師を頼んでいたが、お金もかかるので自分たちで勉強して講師をやるようになって、家で何回か料理を試作して講師の代役をこなしているうちに料理にはまっていたという。

いろいろ勉強中ということで名刺の肩書になったという。

今では家の料理は全てKさんが作っているという。また買い物も担当しており、安くて良いものを仕入れることにも意欲的だ。例えば卵は1パック 98円以下でしか買ったことがないという。スーパーの売り出し情報を分析して何日おきに安売りがあることが分かっているので夫婦二人でおひとり様1パックまでというのを2回並んで4パック買ってくるという。

おばさん二人は目を白黒させている。そこまで徹している男性は見たことがないという表情をしている。

料理はクリエイティブな作業だ。この材料から何ができるかを考えて創造していく。買い物にも食材にも詳しくなり、日本各地や世界各国の料理を研究することも、そして食べ歩きも必要になる。

やはり「男の料理研究所」だろう。

改めて思うことは、年をとってから実益を兼ねた趣味や熱中できるものは至る処にころがっているということだ。

■生きがい

セブ島を出て、船揺れもおさまり気温も 26℃、時おり日差しもあり快適な航海日になる。

ひよんなことから 59 才男性の身の上話を聞くことになる。彼は漂々とした風貌で人当たりも良い。56 才で会社を辞めて今回初めてクルーズに乗船してきたという。現在は職についておらず不動産の家賃収入と個人年金で生活をしつつあちこちに長期旅行にも行っているという。いわば悠々自適な独身貴族だ。今は結婚する気はないというが、できれば老後を見てくれる若い女性がいればありがたいともいう。若い娘ならば彼が亡くなって遺族年金が長くもらえるからいいだろうとも言っている。

これからどうするのかとか、何かやりたいことはないのかと聞くと特にこれと言ってはなく、働く気もないという答えがさらりと返ってきた。

確かに収入と支出については人生設計ができているが、私は何かしっくりしない。何となく生きているとしか思えない。何がやりたいかとか、夢みたいなのが感じられない。

重ね合わせるように昨夜一緒飲んだ料理に生きがいを見つけたKさんの顔が浮かんできた。

■赤道通過

1月17日昼過ぎに赤道を通過する。12時48分に船の汽笛を鳴らして通過を知らせるという粋なことをやってくれる。多くの乗客がデッキに上がって来て、赤道通過を祝っている。

そんな中、後の方から「どれが赤道なの？」とおばさんたちの声が聞こえる。そんな印はある訳ないのだが、親切そうでユーモアに富んだおじさんが「あの赤い線が赤道ですよ、ほら見えるでしょう」と指をさす。おばさんたちは「何処？何処？」と探し始める。微笑ましい光景だ。

■芸達者大会

大きな船内イベントが開催される。乗客の中で歌や踊りなどの一芸がある人達が出演する「芸達者大会」だ。リピーターが多いので芸達者たちも多く、これに出演することを目的に乗ってくる人も多い。いや、正確に言えばリピーターだから芸達者ではなく、リピーターはイベントに慣れておりイベントが好きだから乗って来る。言わば怖いもの知らずになっているのだろう。

私も出演するので、夕方からあわただしく準備に入る。知らないうちに怖いもの知らずになっている。演目は落語、前回の地球一周クルーズでも演じたが、あれ以後演じておらず不安がある。そして不安を払拭できるものは練習のみである。私も2~3日前からデッキでウォーキングをしながら練習していた。

開場20分前、既に100人くらい待っている。開演時には満員、約600人の観客で埋め尽くされている。私もさすがに緊張するかと思ったが、やはり練習は嘘をつかない。



演じた後に居酒屋で祝杯をあげていると、別のテーブルの人から焼酎ボトル一本の差し入れを頂く。落語が良かったから感謝のしるしというからありがたい。翌日の朝食のテーブルで昨夜の落語は良かったとお褒めの言葉を頂く。それなりに反響があるからありがたい。やはり芸は身を助けるということか。

■妻も忙しい

妻も麻雀同好会らしきものに参加し、麻雀を楽しんでいる。初心者向けに懇切丁寧に教えてくれるというので、この船に乗ってから始めた。麻雀はボケ防止に良いと言われていたので何もやらないよりは良いかも知れない。

俳句の会にも入ったようだ。こちらは例のスコットランド好きの N さんが主宰している会で、N さんに半ば強引に誘われたようだが、まんざらでもない感じで喜んでいる。いずれにしても忙しくなりそうだ。

■スタッフ紹介

船の運営スタッフの紹介企画があったので冷やかに見学に行く。この船にはユニークなスタッフが多いが、今回最も私がユニークと感じたのがエビちゃんと呼ばれているアラサーの青年だ。乗船して間もない頃にレストランで同席して話をしたが、私の話にえらく乗り気の反応を示したのでちょこちょこ顔を合わせると話をするようになった。

その私の話はさておき彼の人生はボルダリングに命を懸けていたという。現在ボルダリングは東京オリンピックにも採用されるので人気急上昇しているスポーツだが、彼は人気が出る直前で第一線から身を引いてこの船に乗ったという。だから彼のライバルだった選手たちが世界大会で優勝するなどしてマスコミに取り上げられているのを見ると、自分の選択は正しかったのかという人生のターニングポイントを惜しみながらも歯がゆい思いをしているという。

別の 30 才台の女性スタッフの話になる。彼女はこの船で世界平和を訴えたいという。世の中の一部の悪い人が間違った方向に舵を切り、大多数の人が無感心なので良い社会が生まれない。このピースボートでそれを変えていきたいという崇高な考えを持っている。

私は少し、いや相当に驚く。この決めつけ方、そして自分は絶対に正しいという考えに困惑してしまう。人は皆、何かしらの思いを持って生きている。政治家や経営者は多角的に見て苦渋の決断をすることの方が多く、一見無関心に見えている人たちもそうではなく何か考えて行動している。もっと広く深い視点で見ることが出来なのか残念ではない。

そんな時、23 才の若い女性スタッフはこの船に乗る理由として、色んな人の人生を知りたいという。この船には各方面で貴重な経験を積んできた素晴らしい人たちがたくさん乗っており、その人たちと直に話をする中で、先人たちの人生から学び自分の糧にしていきたいという。

私は彼女のその言葉、その発想に大きな拍手を送った。

第四章 バリ島

■バリ島もタクシー

1月19日インドネシアのリゾート観光地のバリ島に寄港する。南緯8度ということで南半球、赤道近くなので相当に暑いと想像していたが雨季なので暑さはそれほどでもない。代わりに雨に悩まされることになる。

バリ島はオプションツアーに申し込むか迷っていた。船が着くベノア港から繁華街のクタまでタクシーで30分くらいかかるので、港からクタまでの往復送迎というオプションツアーが4000円で用意されている。

普通にタクシーで行ってもそんなにかからないよ、という話を一週間前に聞いていたのとセブ島の経験から東南アジアのタクシーは安いという認識を持つようになっていたので飲み仲間と一緒にタクシーをチャーターして回ることにした。

メンバーは基隆と一緒に歩いたEさん、酒好きで面倒見が良いHさん、そして私たち夫婦での4人だ。そしてタクシー乗り場に行こうとしたら、おばさん二人から「連れ合いたちとはぐれてしまったので同乗できませんか？」と声を掛けられる。タクシーは4人でいっぱいなのでと切り返すと「6人乗りがあります」と向こうも事前調査をしている。

では6人乗りがあればということで、タクシー乗り場で片言の日本語を話す客引きのお兄さんと交渉を始める。確かに6人乗りがあり、価格は10時間チャーターして120万インドネシア・ルピア(Rp)という。とんでもない大きな数字だが日本円換算で一万円ちょっとだ。値切り交渉をして100万Rpまで下げて交渉成立、日本円で8400円なので6人で割ると1400円になる。この金額で10時間のタクシー旅が始まるかと思うとワクワクしてくる。

おばさん二人はラッキーだったと感謝感激している。それはそうだろう英語が話せるEさんが運転手と話をしてくれるし、面倒見の良いHさんと社内でいろんな話ができる。Hさんは世界や日本をかなり旅している人で話題に事欠かない。

旅とは偶然の連続、予期せぬことが起こる。そして運も大事だ。人生もかもしれない。

最初に行くのはタマンアユン寺院だと運転手のワイアンさんに伝える。Eさんと事前打ち合わせでタマンアユン寺院とタナロット寺院には行こうと決めていた。

タクシーで街中を走るとセブ島に似ている。車とバイクがあふれる道路事情と、例のあうんの呼吸で信号のない交差点に突入し曲がる技のすごさも同じだ。ただ道路や街並みはセブ島に比べるときれいで整備されていて、少し社会も成熟しているように感じる。

セブ島と同じように街には人が多く出ていて、子供たちも多い。ただし、このバリ島の活気はセブ島では感じなかったような何かを感じる。

それは何だろうか。

私にもはっきり分からないが、混とんとしたセブ島に比べてバリ島は街全体が少し大人になっていて秩序があり、一つの方向に向かって社会が歩んでいるとでもいうのだろうか。だからエネ

ルギーを感じる。人間もただ元気なだけではダメで、何かに向かって集中して力を出している姿の方がエネルギーを感じるというものだろう。

日本でいえば昭和 30 年代 40 年代の高度成長期の頃かも知れない。ちなみに今の日本では何かに向かって国民が一致団結しているエネルギーを感じることは残念ながらない。

■タマンアユン寺院

渋滞に悩ませられながらも 1 時間半ほどでタマンアユン寺院に着く。もはや 1 時間超えのタクシーにも慣れてきた感がある。

ここは世界遺産に登録されていて、回りを掘りに囲まれた寺院で芝生が美しい。中心部は茅葺の 5 重の塔から 11 重の塔くらい、さまざまな高さの塔がある。



バリ島はイスラム教徒が多いインドネシアにあってヒンズー教の島だ。15 世紀以降この地域の島々がイスラム化される中で、隣のジャワ島などからヒンズー教徒がこの地に集結したのでバリ・ヒンズー教という形で現在まで信仰が続いている。

見物客もあまり多くなく、独自に発展したヒンズー教文化をゆっくり見ることができた。

昔、学校で世界三大宗教ということでキリスト教、イスラム教、仏教と教えてもらったが、世界を回るとそんな感じはしない。キリスト教、イスラム教に比べると仏教はマイナーな存在だ。信徒の数でいえば仏教ではなくヒンズー教が 3 番目になる。

次のタナロット寺院に行く前に途中でレストランに寄り、遅めの昼食になる。運転手のお勧めのレストランは水田風景を臨む場所にあり、屋根は茅葺で東屋風なので外気と一体化して天井の扇風機からの風が気持ち良い。

恐らく観光客向けのレストランで運転手がお客を連れて行くと何がしかのバックマージンがもらえるようになっているのだろう。その意味では割高かもしれないが、食事も現地の味わいで満足いくものだ。ビールをいれても 1000 円程なのはありがたい。



■バリ島のモンシャンミッシェル

タナロット寺院は海に浮かぶ島の上にある寺院で、潮が引くと島に渡れるという。いわばフランスのモンシャンミッシェルとも似ている。ただし、規模的には 1/10 スケールくらいの差がある。



ここはバリ島南部の西海岸なので、インド洋を臨む夕陽観賞スポットとしても有名、5 時頃から夕陽目当ての観光客でにぎわう。あいにくの雨模様の曇天で今日は夕陽が見えないこともあって、私たちは観光客を横目に早めにここを後にする。

帰り路でコーヒーガーデンなる処に案内される。これも運転手のバックマージンの対象なのか示し合わせたように迎え入れられる。

お土産に高いコーヒーを買ってもらうために色んな工夫をしているのが面白い。昔のコーヒー

の作り方、ミニゴルフ、小動物の動物園、水田風景を眺めながら試飲など、苦心の跡が見える。

ここで生まれて初めてドリアンコーヒーというものを飲む。果物の王様ドリアンの味がする甘いコーヒーだが、ドリアン特有のあの匂いはしない。

やはりドリアンはドリアン、コーヒーはコーヒーにしておいた方が良さそう。コラボをして両方の良さがさらに引き立つというのが理想だが、どちらも主張が強すぎて双方ともに引き立たず、ケンカしているような味が残念だった。

■バリ島 2 日目

今日も船はバリ島に停泊しているが、土砂降り昨日よりはひどい雨になっている。

実は 2 日前の航路説明会の中で、バリ島 2 日目は大きな旅客船が栈橋を使用するから、一日目夜のうちに沖合に出て投錨（錨をおろすこと）するので、2 日目は沖合からテンドーボートで栈橋までピストン輸送するという。

大雨の中、テンドーボートに乗り込み栈橋に着くと 10 万トンはあるような黒い大型船が横付けされている。この船が相手では勝てないねと乗客の声が聞こえる。人間とは知らず知らずのうちに自分たちの立ち位置とか身分とかをわきまえるものなのだと改めて感心する。

今日は出航が 14 時なので早く戻らなくてはならないので買い物とランチに絞って市街地クタ地区まで行く。買い物をゆっくりしていたらあまり時間がなくなり、目に留まった吉野家に早速入る。私は日本と同じかどうかを知りたく牛丼を注文する。妻は日本で売っていない照り焼きチキンプレートというものを注文する。価格はどちらも日本と同じくらいで 400 円弱だ。

小綺麗な店の中を見渡すとあまり客が入っていない。400 円という価格がやはり現地では高いのかもしれない。



ヒンズー教の地域で牛の肉を食べるといことが受け入れられないのだろうか。吉野家の戦略には疑問が残るが、牛丼の味はご飯も含めて全く日本と同じだった。

バリ島での支出も書いておこう。2日間で

1日目の費用はタクシー1400円、食事1000円、コーヒー約100円、寺院2カ所入場料約300円、夫婦二人ではその倍の約5600円、そして土産に約560円使った。

2日目の費用は昼食400円、タクシー往復約1000円、夫婦二人で約2800円、土産は2770円だ。

■夏祭り

1月22日は船内イベントとして夏祭りがある。それに呼応するかのように抜けるような青空で天気も良い。よって日差しもかなりきつい。

浴衣ファッションショーなる催しも開催される。私は落語をするので浴衣を持ってきたので参加することになっていた。

それにしても外国人の浴衣はどうしてもぎこちない。背の高い男の英会話の外国人先生は浴衣が短く、膝下くらいしかない。女性は襟元がはだけているなどさまざまな個性あふれる着付けをしている。きっと乗客の日本人のお婆さんたちが着付けたのだろう。何とか綺麗に着つけようといろいろ奮闘した結果、最終的に妥協し「まあ、こんなもんか」という声で終わらせた感じがする。それでも彼らにとっては良い思い出になるに違いない。

ファッションショーはプールサイドで行われる。プールの前のステージでポーズをとって、プールを一周するだけなので1分間の出番だ。私は決めのポーズをとり、欵ちゃん走りでプールを一周したポーズをとる。乗客の世代には欵ちゃん走りは大うけをしている。



夜は盆踊り大会が開かれる。昼間私が浴衣で回ったプールの周りを輪になって踊る。中高年のおばさんたちを中心に、「こんなものか」浴衣を着た外国人や若者も混ざってみんな楽しそうに踊っている。いつの間にかプールを囲む輪は二重になっている。

私はビールを飲みながらその光景を見ていたが、何やら数年前にも見たような気がしてきた。私の母がまだ生きていた頃、晩年は老人介護施設のディサービスに通っていて、その時にも盆踊りなどの催しが頻繁に行われていた。そう、あの時の光景だ。そしてみんな笑顔だった。

■洋上を楽しむ

夜、妻は初めての俳句の会に出かけていく。一日最低 3 句詠むので、昨日あたりからいくつかの俳句を作っていた。嬉しそうに出かけて行ったが、俳句の会だけに「はいかい」にならなければよいと願って送り出す。

俳句会で詠んで好評だった句を妻から聞いたのでここにお披露目しておこう。季節が反転している南半球に行く船旅なので、季語と状況説明に苦労している。

「バリ島の 緑の棚田 祖母しのぶ」

「父逝きし 七度目の日に 旅の句会」

「基隆の 喧噪見守る 山の大砲」

3 日後に自主企画として旅の講演をすることにしたので、本日はその準備で追われた。パワーポイントでスライド 27 枚を作った。久しぶりのスライドづくりなので当初は手間取っていたものの昔取った杵柄とは良く言ったもので、最後の方は時間も忘れて作業に没頭してしまっている。

講演の準備とは知識を整理し、言いたいことを明確にし、伝える方法を考えるというクリエイティブな行為だ。自分のためになるという N さんの助言はやはり正しかった。

居酒屋で知り合った人から聞いた話を思いだした。オーストラリアのパースは欧米人憧れの都市で、住みたい街のナンバーワンということで彼はパースを訪れるのを楽しみにしているという。街はきれいで、公共バスは無料で・・・と熱く語っていた。パース上陸が大変楽しみだ。初めてのオーストラリア大陸だ。